

[成果情報名]ストロビルリン系薬剤耐性のブドウ褐斑病菌に対するテブコナゾール水和剤の有効性

[要約]テブコナゾール水和剤はストロビルリン系薬剤耐性のブドウ褐斑病菌に対して防除効果が高い。また、本剤の散布による「ピオーネ」果粒の汚れは認められず、果粉溶脱は少ない。

[キーワード]ブドウ、褐斑病菌、ストロビルリン系薬剤耐性、テブコナゾール水和剤

[研究所名]岡山農総セ・農研・病虫研究室

[代表連絡先]電話 086-955-0543

[区分]近畿中国四国農業・生産環境（病害虫）

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

県内各地の「ピオーネ」産地でストロビルリン系薬剤（クレソキシムメチル水和剤、アゾキシストロビン水和剤など）に耐性を持つ褐斑病菌が高率に出現して、防除上の問題となっている。そこで、これらの耐性菌にも効果が高い殺菌剤を選抜して、褐斑病の防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

1. ストロビルリン系薬剤に耐性のブドウ褐斑病菌が発生している圃場において、クレソキシムメチル水和剤 3,000 倍液やアゾキシストロビン水和剤 1,000 倍液は防除効果がほとんど認められないが、テブコナゾール水和剤 2,000 倍液は非常に高い防除効果が認められる（図 1）。
2. テブコナゾール水和剤 2,000 倍液の散布によって、「ピオーネ」の葉や果粒に葉害は認められない。また、収穫果房における果粒の汚れは認められず、果粉溶脱は少ない（表 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. テブコナゾール水和剤は 2010 年 7 月にブドウ褐斑病に適用拡大されている（収穫前日まで/3 回以内）。
2. 褐斑病が進展した後にはテブコナゾール水和剤でも効果が不十分となるため、発病前または発病初期（岡山県南部の簡易被覆栽培で 6 月上旬～中旬頃）から散布する。
3. テブコナゾール水和剤は DMI 剤（ステロール脱メチル化阻害剤）の 1 種であり、病原菌の本剤に対する耐性の発達を防止するため、本剤を含む DMI 剤の使用回数は年間 2 回までにとどめるとともに連用を避けることが望ましい。

[具体的データ]

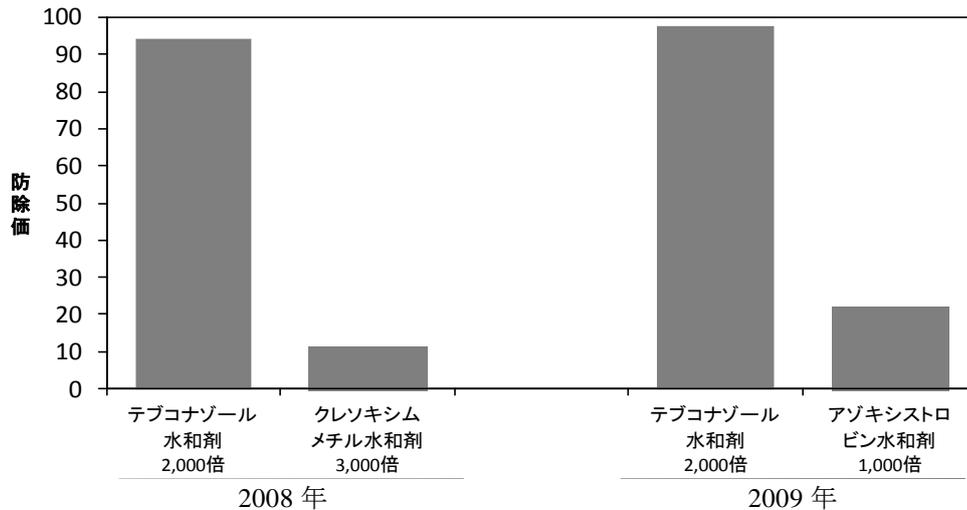


図1 ストロビルリン系薬剤耐性褐斑病菌の発生圃場におけるテブコナゾール水和剤の防除効果

注) 試験場所：岡山農総セ農研病虫研究室圃場、品種：ピオーネ（簡易被覆）
 ストロビルリン系薬剤耐性菌の検出率：5mM 没食子酸 *n*-プロピル加用条件下でアゾキシストロビンの最小生育阻止濃度が 100ppm を越える菌株を耐性菌とし、供試圃場の 2007 年 8 月時点の検定で耐性菌率 50%
 2008 年度試験：薬剤散布日；2008 年 6 月 4 日、6 月 17 日、7 月 1 日
 発病調査日；2008 年 8 月 18 日、発病程度；多発生(6 月下旬初発)
 2009 年度試験：薬剤散布日；2009 年 6 月 8 日、6 月 19 日、7 月 3 日
 発病調査日；2009 年 7 月 18 日、発病程度；多発生(6 月下旬初発)
 防除価 = 100 - (薬剤処理区の発病度 / 無処理区の発病度) × 100
 発病度 = 100 × Σ(発病指数 × 程度別発病葉数) / (総調査葉数 × 4)
 発病指数は、0: 病斑無し、1: 病斑が 1~3 個、2: 4~10 個、3: 11 個以上で病斑面積が葉の 50% 未満、4: 病斑面積が葉の 50% 以上および落葉とし、調査葉数は約 250 葉/区とした

表1 テブコナゾール水和剤が「ピオーネ」の生育に及ぼす影響（2008 年度試験）

薬剤名	希釈倍数	薬害		果粒の汚れ	果粉溶脱
		葉	果粒		
テブコナゾール水和剤	2,000 倍	— ^z	—	—	少 ^y
クレソキシムメチル水和剤	3,000 倍	—	—	—	少~中
無散布				—	—

^z —；症状が認められないことを示す

^y 無、微(果粒の一部に軽微な溶脱斑あり)、少(微より溶脱斑が目立つが、実用上問題なし)、中(明瞭な溶脱斑が目立ち、実用上やや問題あり)、多(果粉の消失面積 50% 以上で実用上問題あり)の 5 段階で評価した

(井上幸次)

[その他]

研究課題名：ストロビルリン系薬剤耐性ブドウ褐斑病防除対策

予算区分：県単（現地緊急対策）

研究期間：2008~2009 年度

研究担当者：井上幸次